

葛藤と疑問の構図を持つ 自己内対話

京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授
溝上慎一（みぞかみ しんいち）

Profile — 溝上慎一

1994年、神戸大学教育学部卒業。1996年、京都大学高等教育教授システム開発センター助手、講師を経て、2003年より現職。京都大学博士（教育学）。専門は青年心理学、高等教育。著訳書は『現代青年期の心理学：適応から自己形成の時代へ』（有斐閣）、『自己形成の心理学：他者の森を駆け抜けて自己になる』（世界思想社）、『自己の心理学を学ぶ人のために』（共編、世界思想社）、『対話的自己：デカルト／ジェームズ／ミードを超えて』（共訳、新曜社）など。



自己内対話の基本は対話にあり

ボクシングの話。ボクシングは体重別の階級制を採っているのです。たとえばライト級（58.967～61.235kg、ただしプロボクシングではポンドで表記する）やミドル級（69.853～72.575kg）といった体重別の階級で試合をする。自分のふだんの体重で戦えばいいと考えれば話は簡単だが、自身の最高のパフォーマンス（動きやパンチの速さ、力など）を出せるベスト体重は何kgかと考えていくと、一般的にはふだんより軽めの体重となる。こうして、食事と体重との関係がボクサーには常につきまとい、場合によっては減量に苦しんだり、美味しいものを食べられないで苦しんだりするボクサーの話が記事で取り上げられることになる。

図1はこの状況を例にしたものである。Aのほうは、「お腹いっぱいになるまで食べてしまえ。お菓子もおいしいぞ!」という悪魔のささやきと、「プロのボクサーなんだから、好きなように食べてはいけない。カロリーと栄養を計算して食事を摂らないとね。頑張ってるね!」という天使のささやきを共に聞いて葛藤している個人の姿を描いている。マンガなどで描かれる典型的な葛藤描写の一つでもある。他方でBのほうは、Aを無理矢理自己内対話の構図で描き直したものである。内容的にはほとんど同じである。自己内対話とは、自分のことをめぐって自分自身と対話することである。ひとりの個人のなかに複数の私がいることを仮定すること

が特徴である。「お腹いっぱいになるまで食べたいなあ。お菓子も食べたいなあ!」と思いつつも、いやいや、「プロのボクサーなんだから～」と考える私がついて、両者が対話しつつも葛藤している姿を描いている。

理論的にはBは自己内対話の構図になっていると思うが、どうも不完全である。Aのほうがわかりやすいし、Bを持ち出す必然性がない。なぜこうなるのかと考えてみると、答えは意外と自己論から離れて、対話とは何かという話に行き着く。つまり、Aにおいては、天使のささやきが望ましいことで、悪魔のささやきが望ましくないことという両者の善悪が明瞭である。両者のやりとりは葛藤を引き起こすものではあっても、対話にはなっていない。対話になっていないから、自己内対話の構図にも無理があると感じる。それでは、対話とはどういうものなのか。

対話とは、「市長が住民と対話」とか「二国間の対話」といったように、相異なる考えや信条を持つ二人あるいはそれ以上の者（集団）同士が、互いに独立した存在として認め合うことで、互いの考えや信条を語り合うことである。そこには、両者の一個存在としての独立性・独自性を尊重しての「語り」「語られ」の関係性があり、会話ややりとり以上のものがある。対話といえばマルティン・ブーバーを思い浮かべるが、彼がユダヤ人の解放を目指しながら、『我となんじ』を執筆したことはよく知られる。ブ

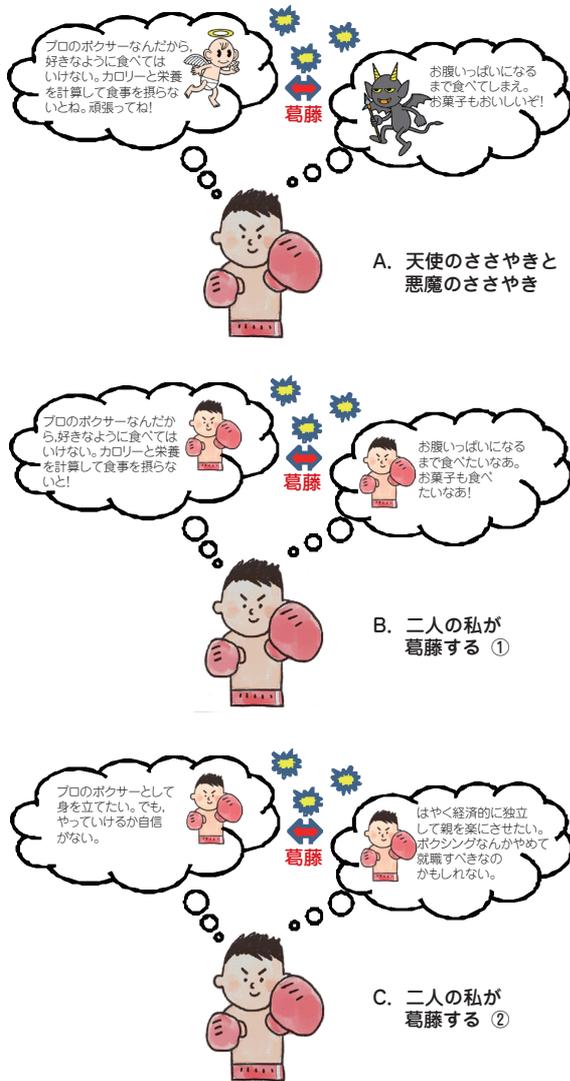


図1 さまざまな葛藤の例

ーバーは、デカルトに始まる近世の自我哲学を克服して、具体的な人間存在の対話的關係性を追究する哲学思想を展開したが、その仕事の背後にブーバーのユダヤ人としての、あるいはユダヤ人解放運動によって培われてきた他の民族・信者（ドイツ人、アラブ人、カトリック・プロテスタントの信者、神学者など）との交わり（対話）を目指した彼自身の宗教的な信念があったことを見逃してはならない（平石, 1991）。つまり、容易に歩み寄れない他者や他の集団と交わりという文脈のなかではじめて、「対話」という言葉が生まれ、生きるのである。これをもとに「市長が住民と対話」や「二国間の対話」

を見ると、それらが単なる二者間の会話ややりとり程度のものでないことはよく理解されよう。

それでは、Bとまったく同じ構図で内容だけ変えたCだとどうだろうか。Cは、「プロのボクサーとして身を立てたい。でも、やっていけるか自信がない」と思う私と、「はやく経済的に独立して親を楽にさせたい。ボクシングなんかやめて就職すべきなのかもしれない」と思う私が共存できずに葛藤している姿を描いている。これだとBと違って、どちらの私もそれなりに自己のなかでの存在理由があり、単なる葛藤の構図のみならず、こちらの私で行こうか、あちらの私で行こうか、ああでもないこうでもない自己内対話している構図として十分理解されることになる。

疑問構図としての自己内対話

しかし、自己内対話には葛藤構図としてのものではなく、疑問構図としてのものもある。図1-Cのような葛藤構図では、葛藤している二人の私がいかなる姿や態度、信念を持つものなのかが比較的明確である。要は、「プロボクサーとして身を立てたい」「はやく経済的に独立したい」と思う私が、自己のなかに明確に存在するわけである。しかし、多くの人びとの生活や人生のなかでは、その私がいかなるものがよくわからないことがあり、あるいは私はいったいある課題をどう理解しているのかがわからないということがあり、そこに広い意味での理解を促す自己内対話という機能が導入されるのである。

小学3年生の国語の「太郎おろぎ」の教材を用いて、自己内対話を授業で育てるという実践を見てみよう（山田, 1990）。学校教育の場面では比較的なじみのある自己内対話の用いられ方である。教材は、太郎がしのちゃんの消しゴムを取り上げ、床の穴に落としてしまった事件を中心に描かれている。太郎は、落とした消しゴムを床下に探しに行くが、授業が始まっても

帰らない。しのちゃんは困って下ばかりを見ており、ついに先生から「しの、下ばかり見て、何してる」と尋ねられてしまう。しのちゃんとはっさに、「こおろぎが鳴いているんです」とうそをついてしまう。太郎に消しゴムを取り上げられ、いじめられていたのに、なぜしのちゃんは先生にそれを言いつけなかったのか、という疑問をもとに、子どもたち同士のお互いにかばい合う温かい心の交流を学ばせようという教材である。

図2は、この授業におけるある生徒の自問自答ノートの一部である。もう一人の自分を設定し、その自分に問いかける自問自答形式を取ることで、教材に対する理解や解釈を深めようと意図されている。もちろん、ここでの問いが生徒任せになっているわけではなく、問いが充実したものとなるための他の生徒とのグループ学習等は、事前になされている。図では、生徒が自分で問い(Q)を立て、それに自分で答える(A)

Q. どうしてしのちゃんは太郎のことを言わなかったのか?
 A. それはしのちゃんの消しゴムをとりに行ってるんだから、そのことを言ったら、太郎がおこられてかわいそう。
 Q. 実さいの見えは何ですか?
 A. こおろぎです。75ページの3行目から8行目に、その時、ゆかの下で太郎におわれたこおろぎが一びき、あなからとび出してきました。「こおろぎが鳴いているんです。」と、しのちゃんは、とっさにそんなことを言っていました。と書いてあるから。

図2 ある生徒の自問自答ノート
 (注) 山田 (1990), p.55 をもとに筆者が作成

自問自答の様子が言語化されている。

主体が私にポジショニングを重ねて声を重ねる、それが自己内対話に見えるだけ

図2の自己内対話を図1-Cと同じかたちで示したのが、図3である。一瞥して図1-Cと違うのは、問い(Q)から回答(A)への方向性が一方向であり、図1-Cのように対話となっていないことである。学校教育の場面では、これを自己内対話と呼んで実践しているのだから、対話となっていなくても、こういうのも自己内対話と見なしていいだろう、と考えるのもひとつである。しかし、ここでは図1-Cと図3に通底する理論を考えてみたい。

そもそも、自己内対話は「自分自身をテーマとして思考する」ことであって(梶田, 1987)、外界での二人あるいはそれ以上の者(集団)同士の対話とまったく同じではない。対話はあくまでメタファーであって、頭のなかで外界と同じような対話が繰り返し広げられていると理解してはいけない。プーバーの思想をもとに述べた両者の一個存在としての独立性・独自性を尊重するような文脈も、図3において、表だってはほとんど見られない。それでも、これらをひっくり返して対話と呼びたくなるのは、ある私と別の私とがぶつかったり(図1-C)、ある私と別の私とが問答したり(図3)するからであり、登場する一人ひとりの私が異なる人格を持つものどこかで見なしているからである。私が異なる人格を持つものと見なせるならば、表だっては見えなかった図3における両者の一個存在と



図3 疑問構図としての自己内対話

しての独立性・独自性を尊重するような文脈も見えてくることになる。

筆者は、大学生のとき、梶田叡一の『自己概念と教育』（1987）に書かれている自己内対話の考えを読んで、これを自己の研究として取り組みたいと思った。しかし、自己研究のなかで自己内対話を理論化しているようなものはおよそ見あたらず、学部生時の知識の無さも合わさって、結局は自己概念とか自尊心とか、そうした古典的なテーマに取り組んでいくこととなる。しかし後に、ここで言うところの自己内対話を自己論として理論化しているハーマンスらの「対話的自己（the dialogical self）」論に出会う（Hermans & Kempen, 1993 / 溝上 他訳, 2006 ; 溝上, 2008）。最後に、対話的自己論を紹介して自己内対話を理論的に説明し、本稿の締めとしよう。

ハーマンスらの対話的自己論は、W. ジェームズの I と Me の自己の二重性を基礎としつつ、それまで客体として静的存在であった Me（私）に「声（voice）」を授けて、Me（私）が主体ともなり得る自己論を作り上げた点に大きな特徴がある。Me（私）を主体にするためにハーマンスらが採用した概念は、ポジション・ポジショニングである。つまり、主体としての I は、自己を「知る」（self as knower）という機能だけではなく、ある Me（私）にポジショニングして（ハーマンスらはこれを「I ポジション」と呼ぶ）、ポジショニングした Me（私）から世界を見る、他の Me（私）に語りかける、といった機能をも持つとみる。ハーマンスらはアリスの事例を通して、彼女が「開放的な私」にポジショニングしてそこから見た自己の世界観と「閉鎖的な私」にポジショニングしてそこから見た自己の世界観とが、一個の主体が同じ自己の世界を対象として見たものであるにもかかわらず、まるで異なっていたことを紹介している。筆者（溝上, 2013）も同様の現象を実験——ローゼンバーグの自尊心尺度を用いて、ポジショニングした三つの異なる私から感じられる自尊心の違い——によって確認した。このような事実は、自己のなかに存在する一つひとつ

の Me（私）が、決してジェームズ自己論的に言われるところの客体で静的な Me（私）であるとは限らず、場合によっては一個存在としての独立性・独自性を兼ね備えた、主体ともなり得る Me（私）であることを示唆している。こうして、対話のお膳立てができあがる。

そして、I がある Me（私）（「プロのボクサーとして～」）にポジショニングして「プロのボクサーとして～」という声を発する。次いで、別の Me（私）（「はやく経済的に独立して～」）にポジショニングして、「はやく経済的に独立して～」という声を発する。これを軌跡としてつなげば、それはまるで二人の私対話しつつも葛藤しているように見える。そして、自己世界のなかでの私同士の対話であることから、これが自己内対話と呼ばれるものとなる。もちろん内実は、同じ主体の異なる私へのポジショニング移動である。実際に対話などがなされているわけではない。自己内対話を理論的に説明すれば、このようになる。

文 献

- Hermans, H. & Kempen, H. (1993) *The dialogical self: Meaning as movement*. San Diego, Calif: Academic Press. [H. ハーマンス, H. ケンペン / 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳（訳）（2006）『対話的自己：デカルト／ジェームズ／ミードを超えて』新曜社]
- 平石善司（1991）『マルチン・ブーバー：人と思想』創文社
- 梶田叡一（1987）『子どもの自己概念と教育（増補）』東京大学出版会
- 溝上慎一（2008）『自己形成の心理学：他者の森を駆け抜けて自己になる』世界思想社
- 溝上慎一（2013）ポジショニングによって異なる私：自己の分権的力学の実証的検証．心理学研究, 84 (4), 343-353.
- 山田裕信（1990）「自己内対話を育てる」人間教育研究協議会（編）『自分自身への気づき（教育フォーラム 8）』金子書房 pp.51-58.